

1. 教育家としての山田顕義

【教育家 山田顕義略年譜】 *赤字は山田の事績

西暦	和暦	月	山田顕義と時代の動き
1844	弘化1	10	萩藩士山田顕行の長男として松本村に生まれる(通称市之允)。
1854	安政1	3	吉田松陰と金子重輔が伊豆下田で、米国ペリー艦隊の軍艦に密航を企て失敗。松陰は萩の野山獄へ幽閉される。 藩校明倫館に入り、師範馬木勝平に剣術（柳生新陰流）を学ぶ。 吉田松陰の松下村塾に入門。
1856	安政3		
1857	安政4		
1858	安政5		師・松陰より扇面詩「与山田生」を与えられる。
1859	安政6	10	吉田松陰が安政の大獄により処刑される。
1871	明治4	9	司法省明法寮設置（司法省法学校の前身）。
		11	岩倉米欧使節団に兵部省理事官として随行。アメリカ滞在。 フランス・オランダ・スイス・イギリス等に滞在、諸制度を調査。
1872	明治5		
1873	明治6	4	開成学校法学科設置（東京大学法学部の前身）。
		6	ドイツ・オーストリア・ロシア滞在を経て帰国。
1874	明治7	7	司法大輔となる。
1875	明治8	9	刑法編纂委員長となる。
1878	明治11	2	刑法草案審査委員となる。
1880	明治13		東京法学社（のち和仏法律学校、法政大学の前身）、 専修学校（専修大学の前身）創立。
1881	明治14	1	明治法律学校（明治大学の前身）創立。
1882	明治15	8	皇典講究所設立。山田、皇典講究所の「賛襄」(協賛者)に推挙される。 東京専門学校（早稲田大学の前身）創立。
1883	明治16	12	司法卿となる。
1884	明治17	7	勲功により伯爵を授けられ華族に列する。
1885	明治18	12	内閣制度発足。初代司法大臣となる。
1887	明治20	10	法律取調委員長となる。
1889	明治22	1	皇典講究所所長となる。 10月4日、日本法律学校創立（日本大学の前身／皇典講究所内、麹町区飯田町5丁目8番地）。
1890	明治23	7	皇典講究所に國學院（現國學院大學）設置。
1892	明治25	11	生野銀山視察中に死去（49歳）。

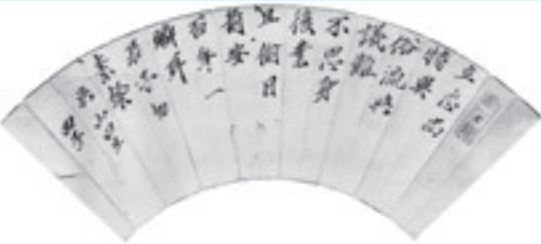
吉田松陰から与えられた扇面「与山田生」

山田顕義（通称は市之允）は、14歳の安政4年（1857）、伯父山田亦介（松陰の兵学の師）の推薦により、吉田松陰の松下村塾に入門しました。

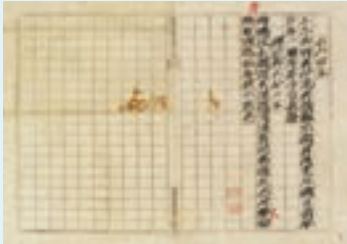
松下村塾ではほとんどが個別教育で、国学を学ぶ者、歴史を学ぶ者、漢籍を読む者などさまざまで、門弟たちは師とともに米を搗き、薪を割り、水を汲みながら古今聖人の逸話や時事問題を論じ、協同・勤労精神を養ったのでした。こうした師弟の交流のなかで、松陰の思想や信念が長州藩の若者たちを魅了し、松陰の死後も強い影響力を与えたのです。山田顕義も、師・松陰や同門の先輩たちとの交わりを通して、後年大成する素地を養ったのです。

山田顕義が吉田松陰から教えを受けたのは、安政4～5年にかけての1年余りでした。しかし、山田は松陰の教えを守り、よく勉強したようで、少年期を萩で過ごした国木田独歩がその著書のなかで富永有隣に聞き書きをしたとき、富永が「市イーは中々よく読む子であった」と、山田の勤勉振りを回想しています。

そうした多感な青年期にあった山田顕義に、師・松陰は「与山田生」と題した詩を扇面に揮毫して立志の目標を示したのです。



扇面「与山田生」



松陰自筆詩稿（複製）

皇典講究所所長に就任

明治15年(1882)、古典（国典）研究と神官を養成する機関として皇典講究所きやうてんこうきゆうじョが設立されます。

吉田松陰や大伯父村田清風（長州藩藩政改革者）の思想を受け継ぎ、政府首脳部の中でも神道や神社に対する尊崇の念がとりわけ強かった山田は、皇典講究所の設立にも積極的に関わっていきました。

明治14年、神道界を二分した祭神論争が勅裁により終結すると、内務省では神道界を再編しようと模索する動きが出てきました。この年10月、内務卿に就任した山田顕義は、祭神論争の反省をふまえ、政教分離思想を取り入れた、純粋な国典研究と神官養成を目的として皇典講究所の設立を認可したのです。

山田は皇典講究所発足以後もその運営を賛助していましたが、総裁有栖川宮幟仁親王が逝去すると、後任として、設立・発展に尽力した山田が所長に迎えられました。

皇典講究所飯田町校舎（明治32年6月）
皇典講究所は、明治15年8月に設立され、有栖川宮幟仁親王が総裁に就任。
山田顕義は、明治22年10月に講究所内に日本法律学校を創立させた後、翌23年7月には、講究所の規模を拡張し國學院（現國學院大學）を開校した。

〔「新撰東京名所図会麹町区下巻之二」第19編（『風俗画報』臨時増刊第191号）より〕



日本法律学校の創立

明治10年代に入ると、本格的な私法律学校開設が社会的な要請となってきました。東京法学社（法政大学の前身）創立をはじめとして、専修学校（専修大学の前身）・明治法律学校（明治大学の前身）・東京専門学校（早稲田大学の前身）等が次々と開設されていきます。

私法律学校設立の必要性を痛感しながらも、その意を実現することができなかった山田でしたが、日本の伝統や文化を重んじた法学教育の実施を計画していました。

そのようなとき、山田顕義は、宮崎道三郎・榎山資之すけゆき・末岡精一らの法学者たちが構想する法律学校設立の計画があることを知ります。それが、日本独自の法学理論の研究と教育を使命とする法律学校設立計画でした。

山田の全面的な支援により、日本法律学校は、明治22年（1889）10月4日に創設され、初代校長に金子堅太郎が就任しました。



日本法律学校設立主意及規則
〔國學院大學蔵〕



創立者総代宮崎道三郎（1855～1928）



初代校長金子堅太郎（1853～1942）



日本法律学校広告（明治23年4月2日付朝野新聞）

皇典講究所の改革

明治22年（1889）、司法大臣の現職のままこ皇典講究所所長に就任した山田顕義は、皇典講究所の改革を推し進めます。山田の考える改革とは、日本の人種・習慣・風俗・言語など国家成立の要因、すなわち国体を明らかにするというものです。一方で山田は、司法大臣として法典整備を進める中で、その基礎となる国典の研究の重要性を認識しており、このような国典・国史・国法をいっしょに研究する教育機関を皇典講究所のなかに設置しようと計画していたのです。

山田は毎週水曜日に皇典講究所に通いましたが、ある日、司法大臣官邸に講究所所員一同を招き「諸君は乞食しても此の事を成し上げんとの覚悟はありや」と問いかけたといわれ、皇典講究所に期待するところが大きかったことが伺われます。

2. 政治家としての山田顕義

【政治家 山田顕義略年譜】 *赤字は山田の事績

西暦	和暦	月	山田顕義と時代の動き
1844	弘化 1	10	萩藩士山田顕行の長男として松本村に生まれる(通称市之允)。
1855	安政 2	5	山田の大伯父で藩政改革者の村田清風病没。
1857	安政 4		吉田松陰の松下村塾に入門。
1859	安政 6	10	吉田松陰が安政の大獄により処刑される。
1863	文久 3	8	八月十八日の政変。尊攘派公家七卿が都を落ちる。
1864	元治 1	1	高杉晋作とともに脱藩。京に赴く。
		7	禁門の変で長州勢が敗北。久坂玄瑞ら死去。
		8	四力国連合艦隊が下関沿岸を砲撃。
1865	慶應 1	1	高杉晋作クーデター決行、尊王攘夷派が藩政を掌握。
1866	慶應 2	1	長州と薩摩の同盟が締結。
1867	慶應 3		大政奉還(10月)、王政復古の太号令（12月）。
1868	明治 1	1	鳥羽伏見の戦いで長薩連合軍が幕府軍を撃破。
1869	明治 2		この頃から、顕義と称するようになる。
1871	明治 4	11	岩倉米欧使節団に兵部省理事官として随行。
1873	明治 6	11	清国特命全権公使となる（佐賀の乱により赴任せず）。
		11	ボアソナード来日。
1874	明治 7	7	司法大輔となる。
1877	明治10	3	西南戦争に別働旅団司令長官として従軍。
		5	木戸孝允死去。
1879	明治12	9	参議兼工部卿となる。
1881	明治14	10	内務卿となる。
1882	明治15	8	皇典講究所設立。
1883	明治16	12	司法卿となる。
1885	明治18	12	内閣制度発足。初代司法大臣となる。
1889	明治22	1	皇典講究所所長となる。
		10	日本法律学校創立（日本大学の前身）。
1890	明治23	4	民法の四編、民事訴訟法、商法が公布される。
		12	商法施行延期法案が貴族院を通過。
		12	司法大臣の辞表を提出するが慰留される。
1891	明治24	5	大津事件。ロシア皇太子ニコライが負傷。
		6	司法大臣を辞任。
1892	明治25	11	生野銀山視察中に死去（49歳）。

松下村塾の門下生

吉田松陰の松下村塾は、幕末から明治維新に活躍した人材を多数輩出しています。高杉晋作と久坂玄瑞は松下村塾門下でもその俊才を謳われましたが、久坂は禁門の変で敗れた際に自害し、高杉は維新を迎えることなく病で亡くなりました。伊藤博文と山県有明は、明治期に内閣総理大臣となり、日本の国政に大きな影響を与えました。



高杉晋作（1839～67）
〔港区立港郷土資料館蔵〕



伊藤博文（1841～1909）



山県有朋(1838～1922)

法典編纂の激務

近代化を迎えた日本において、諸外国と対等な条約を結ぶ為には近代法を整備し、欧米諸国の領事裁判権を撤廃することが最大の課題でした。

山田顕義は、明治7年に司法大輔に就き、以後、刑法審査委員、法律取調委員長として各法典の制定に取り組み、その姿勢は「殆ンド寢食ヲ忘ルル」ほどだったといいます。山田がボアソナードらの協力を得て整備した民法・商法は明治23年(1890)に公布されます。

しかし、民法は日本の伝統・習慣をよく照らし合わせてから施行するべきだという意見が出され、いわゆる法典論争が起こります。

明治25年(1892)、議会の否決により民法・商法施行は延期とされます。山田顕義の死後、明治31年に新民法、明治32年に新商法が施行されますが、そこには、施行されなかった旧法に基づく部分も含まれていました。



ボアソナード（1825～1910）
1825年、フランス・ヴァンセンヌ市生まれ。パリ大学を卒業。同大学助教授を経て、明治6年（1873）、政府の法律顧問として来日。20年間にわたり法典編纂や、司法省法学校教授、外交政策への助言などに尽力しました。山田の死に際しては「日本國ノ為メニ一大不幸ニシテ、悲嘆痛惜ニタヘザルナリ」と深く悼みました。
〔法政大学図書館蔵〕

錦絵「泰平有名鑑」
(豊原国周筆 明治15年)
これは、当時の政府の中枢を担っていた人物を描いた錦絵です。
山田は右中ほどにいますが、皇族、旧公家以外ではひとりだけ和装である点が注目されます。



政治家としての^{くんとう} 山田 薫陶

政治家として山田顕義に大きな影響を与えた一人が木戸孝允（桂小五郎）です。木戸は、長州藩を代表する人物で、幕末より第一線で活躍し、薩摩の西郷・大久保とともに「維新三傑」として数えられています。

木戸と山田顕義がとくに密接な関係になるのは、岩倉使節団の欧米視察中のことです。木戸の日記によると、両人はよく面会して、ともに異国の街に散歩に出ていたようです。

木戸の開明的な思想と、欧米見聞により山田の法思想が確立したといっても過言ではないでしょう。



木戸孝允（1833～77）
〔港区立港郷土資料館蔵〕

大津事件

明治24年(1891)5月11日、日本を訪問中のロシア皇太子ニコライ（後のニコライ2世）に、滋賀県大津市で警備中の津田三蔵巡査が突然斬りかかるという事件が起こりました。

当時、日本はまだ近代化間もない時期で、被害者が大国のロシア帝国皇太子ということもあり、日本国中が大混乱に陥りました。

政府はロシアに対する配慮から、皇室罪を適用して津田巡査を死刑にすべく、司法大臣山田顕義と内務大臣西郷従道が大審院長児島惟謙の説得にあたりました。

裁判が行われる直前、児島は山田・西郷と面会し、津田を無期徒刑にすることを改めて伝え、西郷は激怒しましたが、山田はすぐに納得したと児島の日記に記されています。

結局、津田は無期徒刑の判決を受けますが、一方で、ロシアへの配慮として内務大臣西郷従道と司法大臣山田顕義は引責辞任します。

幕末の対外的圧力を肌で感じ、日本の法律の基礎を作り上げた山田としては、政府と児島の双方の言い分が理解できていたからこそ、児島に対し敢えて反論しなかったのかもしれませんが。



津田三蔵（1855～91）



ロシア皇太子ニコライ（1868～1918）



児島惟謙(1837～1908)
天保8年（1837）、宇和島生まれ。明治4年（1871）司法省に入り、明治25年（1892）に大審院長の職を辞するまで21年間の司法官生活を送りました。

3. 軍人としての山田顕義

【軍人 山田顕義略年譜】 *赤字は山田の事績

西暦	和暦	月	山田顕義と時代の動き
1844	弘化 1	10	萩藩士山田顕行の長男として松本村に生まれる(通称市之允)。
1864	元治 1	7	禁門の変において、久坂玄瑞率いる浪士隊に加わる。
1866	慶應 2	6	幕長戦争(四境戦争)開始。高杉晋作指揮の下、 「丙寅丸」に乗組み砲長を務める。
		9	将軍家茂の死去などにより、幕府と長州藩が休戦する。
1867	慶應 3	9	長州藩兵三田尻に集結。先鋒諸隊の総指揮官となる。
		12	王政復古の号令。
1868	慶應4 (明治 1)	1	鳥羽伏見の戦い、「戊辰戦争」開始。長州藩兵を指揮する。
		5	長州艦「丁卯丸」に乗組み、北越へ向かう。
		7~8	越後口海軍参謀となり、長岡城攻略を支援する。
		8~9	官軍が、会津若松城を攻撃。
		10	土崎（秋田）に上陸、陸路青森に向かう。
		11	青森口陸軍参謀となる。
		12	榎本武揚ら蝦夷島政府を樹立し、五稜郭を本営とする。
1869	明治 2	4	海軍参謀を兼ねる。青森港を出港し、江差北方の乙部村 に上陸。箱館に向け進撃する。
		5	五稜郭開城、「戊辰戦争」終結。
		7	兵部省が置かれ、兵部大丞となる。
1871	明治 4	7	陸軍少将となる。
		11	岩倉米欧使節団に理事官として随行、軍制の調査に当る。
1872	明治 5	2	兵部省を廃止し、陸軍省・海軍省を設置。
1873	明治 6	6	帰国。
		7	東京鎮台司令長官となる。
1874	明治 7	2	前司法卿江藤新平らが、佐賀で挙兵「佐賀の乱」。 九州出張を命じられ、大久保内務卿に随行する。
		3	佐賀城落城。江藤は逃れたが、4月に捕らえられ刑死。
1876	明治 9	10	「神風連の乱」「秋月の乱」「萩の乱」と士族反乱が頻発する。
1877	明治 10	2	西郷隆盛が兵を率いて鹿児島を出発、「西南戦争」開始。
		3	長崎出張を命じられ、別働旅団司令長官となる。
		4	別働4個旅団の総指揮官となる。
		9	西郷隆盛らが城山で自刃、「西南戦争」終結。
1878	明治 11	11	陸軍中将となる。
1892	明治 25	11	生野銀山視察中に死去（49歳）。

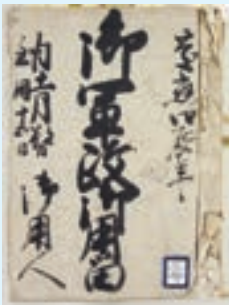
戊辰戦争での活躍

慶応4年(1868)1月、戊辰戦争初戦の「鳥羽伏見の戦い」において、山田は、長州藩諸隊の総指揮官として1000余名を率いて京を守り、1万の幕府軍を退けました。5月、長州艦「丁卯丸」に乗組み、薩摩艦「乾行丸」筑前艦「大鵬丸」を伴って馬関を出航、越後方面に向かいました。北越では、鎮撫総督参謀山県狂介（有朋）が新政府軍を指揮していましたが、最新装備の長岡藩を中心とする兵に手を焼いていました。山田は山県に協力し、北越方面での戦闘を海軍力により支援、長岡城攻略に尽力しました。

一方、幕府海軍副総裁榎本武揚は、指揮下の艦隊を率い江戸を脱出、残存兵力を伴い、10月には蝦夷地へ上陸、五稜郭を占領しました。この頃、山田は土崎（秋田）に上陸しましたが、明治政府は、榎本軍の動きに対応するため青森に兵力を集結。山田も同地へ向い、11月には、陸軍参謀に任ぜられました。明治2年(1869)4月、政府軍は箱館攻略を開始。山田は海軍参謀も兼ねることになり、江差北方の乙部村に上陸し、背後から五稜郭に迫りました。5月、五稜郭は陥落し、戊辰戦争は終結しました。



御軍政御用留
弘前藩が、慶応4年（1868）3月から、明治2年（1869）12月までの軍事関係文書を、日付順にまとめたもの。全30冊あり、現在は、弘前市立図書館が所蔵している。山田は、明治元年11月5日に青森に到着しており、ここに示したのは、翌6日の記事の一部分で、左頁に「山田市之丈と申参謀」と記載されている。



陸軍創設への貢献

明治2年(1869)7月、政府組織の改編により兵部省が設置されます。山田は兵部大丞（兵部省のナンバー4）として、大輔（次官）の大村益次郎を助け、彼が構想する、大阪を新国軍の拠点とした軍備・軍制の整備を推進しましたが、大久保利通らの、薩摩藩勢力と対立しました。大村が亡くなると、実務上の責任者として、また大村派の盟主として政策を引き継ぎ、大阪に兵学寮を設置するなど、新国軍の基礎造りに着手しました。

明治3年、陸軍の兵式はフランス式が採用され、大久保派の主張が退けられました。この頃、旧友であった山県有朋が兵部少輔となり、上司として山田を助ける立場となりました。4年、山田は岩倉米欧使節団の理事官となって、軍事制度の調査・研究に向かいました。帰国の後にまとめた報告書には、軍事力整備の前提として、法律や教育組織などの整備も必要との意見が述べられています。また6年1月に制定された徴兵令も、国民がその意図を理解できないうちは時期尚早であるとして、陸軍卿となって陸軍内の実権を握っていた、山県有朋と対立しました。7年、山田は司法大輔となり、陸軍軍政からは、退くことになりました。

士族反乱の鎮圧

明治7年（1874）、前司法卿江藤新平らが挙兵、「佐賀の乱」が勃発しました。山田は、全権を与えられた内務卿大久保利通に随行、福岡召募隊を指揮して乱の平定に当たりました。戦闘は10日余りで終結し、政府軍が勝利しました。

明治10年2月、陸軍大将西郷隆盛は、1万3000の兵を率いて鹿児島を進発、熊本城を包囲しました。政府は「賊徒征討の詔」を公布、有栖川宮熾仁親王を征討総督に任じ、2個旅団を派遣しました。司法大輔であった山田は、明治天皇に従って京にいましたが、3月、別働旅団を率いて八代に上陸、熊本城へ進撃しました。

4月14日、山田麾下の一隊が城内へ突入、翌15日には、山田も陸軍中将黒田清隆と共に入城しました。18日、別働4個旅団の総指揮官を命じられ、6月には、人吉に撤退した西郷軍を撃破しました。西郷はその後、宮崎から鹿児島へと敗走し、9月24日に、城山で自刃しました。



西南戦争司令長官等集合写真



佐土原落城之図（錦絵）
明治10年(1877)7月31日、三好・山田両少将率いる旅団は、佐土原（宮崎北方）の薩摩軍を陥れ、宮崎を攻略した。

氏名	（西南戦争時の役職・最終階級／爵位）
伊東 祐磨	（東海鎮守府司令長官・海軍中将／子爵）
三好 重臣	（第2旅団司令長官・陸軍中将／子爵）
谷 干城	（熊本鎮台司令長官・陸軍中将／子爵）
中牟田倉之助	（海軍省副官・海軍中将／子爵）
井田 譲	（陸軍省第4局長兼第1局長・陸軍少将／男爵）
三浦 梧楼	（第3旅団司令長官・陸軍中将／子爵）
大山 巖	（別働旅団司令長官・元帥陸軍大将／公爵）
山田 顕義	（別働旅団司令長官・陸軍中将／伯爵）
曾我 祐準	（第4旅団司令長官・陸軍中将／子爵）
野津 鎮雄	（第1旅団司令長官・陸軍中将）
高島 鞆之助	（別働旅団司令長官・陸軍中将／子爵）

大村益次郎（1824～1869）
文政7年（1824）周防国（現 山口県）に生まれる。緒方洪庵らに学び、学塾「鳩居堂」を開く。蕃書調所教授手伝・講武所教授として幕府に仕える。万延元年(1860)、萩藩に雇われ、蘭学や兵学を教えたと共に、山口の普門寺では軍事教練も行なった。後には藩政にもかかわり、軍制改革の指導にあたった。慶応4年(1868)維新政府に仕え、軍政事務の役職を歴任。明治2年（1869）7月に兵部大輔となったが、9月、京都で改革反対派の浪士に襲われ負傷。それが原因で11月に死去。



普門寺（山口市）



山田顕義フランス語名刺
佐賀県立図書館が所蔵している、山田の名刺。岩倉使節団の一員となった陸軍少将時代に作製したと思われるが、肩書きは直訳すると「日本帝國陸軍准将」となる。

山田顕義関連史跡

教育・政治・司法・軍事など広い分野で活躍した山田顕義は、全国にその足跡を残しています。ここでは、現在各地に残る学祖の関連史跡などを紹介しました。



①山田顕義文学碑（北海道三笠市）
明治15年に山田が詠んだ漢詩「在眼天塩石狩洲」の碑が、平成2年達布山に建立された。



②屯田兵招魂碑（北海道札幌市）
西南戦争に出征した屯田兵の戦没者のため、札幌護国神社に山田の撰文で建立された。



③箱館戦争官軍上陸の地（北海道函館市）
山田率いる新政府軍は、旧幕府軍を攻撃すべく明治2年4月に乙部村の海岸に上陸した。



④函館五稜郭
五稜郭に立て籠る旧幕臣らは、明治2年5月についに降伏し、戊辰戦争は終結した。
〔函館国際観光コンベンション協会提供〕



⑤栗林広運日記
栗林広運の慶応4年の日記には、土崎湊に上陸した山田顕義や新政府軍の動向が記されている。
〔秋田県秋田市立中央図書館明徳館蔵〕



⑥山田資料館（栃木県那須郡那須町）
山田が開拓に着手した黒田原には、現在山田資料館があり、山田家の資料が展示されている。



⑦西南戦争戦没者顕彰碑（茨城県笠間市）
西南戦争に出征した茨城県出身者の顕彰のため、山田の撰文で笠間稲荷神社に建立された。



⑧音羽の山田邸（東京都文京区）
明治22年に建てた音羽の山田邸には、明治天皇の臨幸もあった。現在の講談社付近。



⑨日本大学・國學院大学発祥記念碑（東京都千代田区）
昭和60年に本学と國學院大学の共同で、両校の母体である皇典講究所跡地に建立された。



⑩護国寺山田家墓所（東京都文京区）
山田は没後護国寺に埋葬されたが、本学百周年の記念事業により、墓所の改修が行われた。



⑪風折烏帽子の碑（東京都葛飾区）
明治27年、山田作詞の小唄「風折烏帽子」の碑が加藤ひな等により浄光寺に建立された。



⑫山田顕義終焉の地（兵庫県朝来市）
明治25年11月11日、山田は、故郷山口からの帰途、立ち寄った生野銀山で急逝した。



⑬瓦屋跡（山口県山口市）
山田夫人龍子の生家である鹿鳴家が営んでいた旅館で、維新の志士の定宿として有名であった。



山田顕義像（戊辰戦争頃）



⑭山田旧宅（山口県山口市）
山口市内の山田旧宅は、本写真の白石地区と、市役所付近の早間田地区の2ヶ所にあった。



⑮顕義園（山口県萩市）
山田生誕地に、本学90周年記念事業として顕義園を開園した。中央には山田の銅像がある。



⑯松陰神社（山口県萩市）
山田顕義の師である吉田松陰を祀る神社。明治40年に松下村塾の隣地に創建された。



⑰鶴田皓顕彰碑（佐賀県多久市）
鶴田は、山田を補佐し法典編纂に尽した人物。山田の題字で若宮八幡宮に建立された。



⑱官軍上陸の地（熊本県八代市）
西郷軍が包囲する熊本城救援のため、山田らが率いる政府軍は、戦略拠点の八代に上陸した。